

昭和12年8月父島の頻發地震

高田 玄吾, 石井 弘

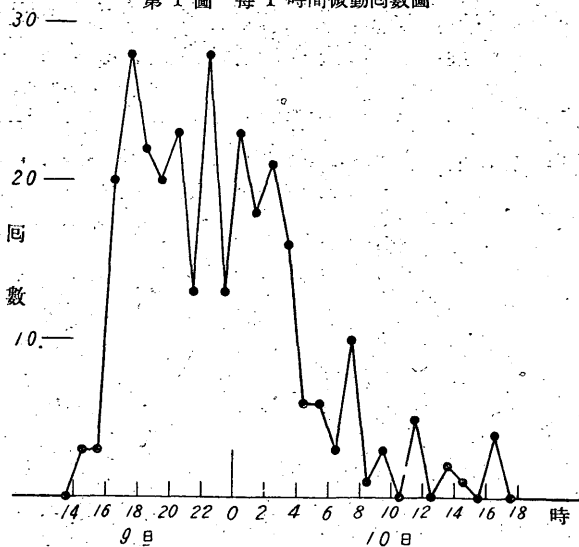
昭和12年8月9日16時頃より父島測候所の地震計に微小な地震が頻繁

第 1 表

日付	時間	回数	震動繼續時間 (秒)	日付	時間	回数	震動繼續時間 (秒)
9	14—15	3	67	10	3—4	16	1288
	15—16	3	109		4—5	6	2058
	16—17	20	1679		5—6	6	351
	17—18	28	1799		6—7	3	173
	18—19	22	2154		7—8	10	937
	19—20	20	3014		8—9	1	74
	20—21	23	2517		9—10	3	159
	21—22	13	2450		11—12	5	1199
	22—23	28	1945		13—14	2	298
	23—24	13	2244		14—15	1	40
10	0—1	23	2531	16—17	4	405	
	1—2	18	2751	11 終日	7	1600	
	2—3	21	1794				

に現れ始め、翌10日4時迄の12時間に245回を算したが、以後次第に減少し、11日中に終熄した。此3日間の微動總回数は299回で、夫等の時刻別回数は第1表及び第1圖の如くである。此頻發地震群の發生及び消滅の様式が極めて急激性のものであつ

第1圖 毎1時間微動回数圖



たことが圖に依つて明かである。之等の大部分は無感地震であつて、有感地震は右表の2回に過ぎなかつた。

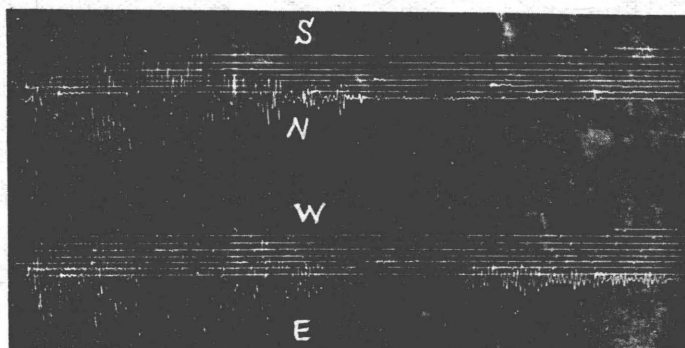
第 2 表

發 震 時				P~S	P~F	M _N
日	時	分	秒	秒	分	μ
9	21	37	51.2	15.0	—	±267
9	23	39	49.8	13.3	20	-493

初動は總じて極めて小さく、初動方向の判別されたものは皆無である。初期微動時間の讀取りの困難なものが多く、確實に讀取れたものは 21 回に過ぎなかつた。其値は 15 秒前後のものが最も多く、10 秒以下のものは見當らなかつた。

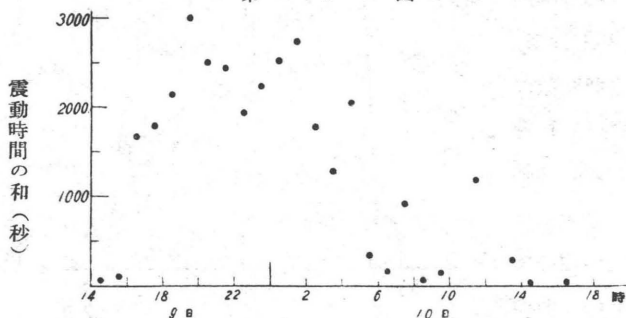
記象型は一般に P が極めて小さく、S は比較的明瞭且優勢である（第 2 圖

第 2 圖 記 象 の 一 例



参照)。但し上下動に於ては初動は不明瞭であり、振幅は徐々に増加して一見所謂深海型を呈し、S 相の判定困難なものが多い。

第 3 圖



今假りに一つの地震の震動繼續時間が其地震の勢力に比例するものと假定して、⁽¹⁾此地震群の地震勢力の推移状況を調べて見る。9日14時より10日17時に至る各1時間内の震動繼續時間は第1表及び第3圖に示す如くなる。即ち地震勢力は最初急速に増加して9日の19~20時に最大に達し、10日朝より急速に減少してゐる様が此圖に依つても明らかである。

今回の地震群を昭和9年5月11日より同月末日頃迄の間に續發した239回の小地震群と比較すると、震央距離に於ては約半分となつてゐるが、記象の形が互に酷似してゐるので、略々同一系統のものと推定され、又震源は從來の經驗より父島の西方に在るものと思はれる。

(於父島測候所)

(1) このことに就ては高橋浩一郎氏の議論がある。K. Takahasi; Seismic Waves and Block Structure of The Earth's Crust. Geophys. Mag., 11, 117-138, 1937.